バカとテストと召喚獣～僕の家族は幽霊！？～

松竹梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと召喚獣～僕の家族は幽霊！？～

【Ｎコード】
Ｎ３１７１Ｚ

【作者名】
松竹梅

【あらすじ】
これは、ある幽霊の少女とひとりの少年の物語。バカテスの第二作です。楽しく読んでいって下さい

プロローグ（前書き）

こんにちは、松竹梅です

バカテスの二作目になりますが、

楽しく読んでいって下さい

プロローグ

いつも…

いつも私はひとりぼっち…

誰にも気づかれることもなく時間が過ぎていく…

春がきて、夏がきて、秋がきて、冬がきて…

季節が永遠に続いていく…

時々、私に気づいてくれる人もいた…

だけど…

だけど、ある人はそれきり学校に来なくなった…

噂ではそのまま転校したみたい…

また、ある人は狂ったかのように逃げていった…

噂ではそのまま隔離病院に入ったみたい…

私はひとりぼっち…

わたしは…

いやだ…

いやだいやだ…

いやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤダいやだ嫌だＩＹＡＤＡイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイ

ヤダいやだ嫌だＩＹＡＤＡイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤダいやだ嫌だＩＹＡＤＡイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダいやだイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤだ嫌だ！

もう…

もう、ひとりはイヤ！

誰か…

誰か気づいて！

私は…

私は此処にいるのに……

「ねぇ、キミ、そんなところで何しているの？」

《え？》

《わ、私が見えるの？》

「なに言ってるのさ。此処にはキミしかいないじゃないか」

あぁ、私の正体を知らないのね…

《私はね、幽霊なんだよ？》

「ははは、冗談はやめてよ」

《ほら、これを見て》

「え？……」

ほら、私が壁をすり抜けるところを見せたら固まっちゃった…

この後は、いつものように逃げていくんだろうな…

そして…

そして、私はまた…

また…

ひとりぼっちになるのね…

「……す…」

「すご～～～い！」

《え？》

「すごいよ！僕、幽霊見るの初めてだよ！」

《お、驚かないの？》

「なにが？」

《私、幽霊だよ？》

「幽霊だからどうしたの？」

《え？》

私はさっきから驚いてばかりである

「そうだ！」

「ねぇ、僕とお友達にならない？」

《!?》

今この子はなんて言った?

お友達?

私と?

《お、お友達になってくれるの?》

「うん♪僕は吉井(よしい)　明久(あきひさ)って言うんだ」

「キミの名前は?」

私?

私の、名前…

《わからない…》

「え？」

《私、自分が誰なのかは分からないの…》

本当…

私は何者なんだろう…

「ん～～、そうだ！僕が名前を付けてあげるよ」

《え？》

「そうだな……吉井（よしい）　幽乃（ゆうの）、なんてどうかな？」

《吉井……幽乃……》

私の…

私の名前…

《ふぇっ、》

「え？」

《うえぇ～～～～～ん！！》

「え！？なんで泣き出すの！そんなに気に入らなかった？」

《ち、違うの》

「？」

《わ、私、ずっと……ずっと、ひとりぼっちだったの……》

「……」

《私を見た人は、みんな……みんな逃げていった。

中には仲良くしてくれた人もいたけど……結局はみんな私のことを忘れていった……》

「……」

《ひとりじゃないと思うと……私……私、うれしくて……》

ギュウッ

《!?》

「大丈夫……今度から僕がキミの家族になってあげるから」

《……家族……》

「だから、今はおもいかっきり泣いていいよ?」

《……明久》

「なに?」

《明久……あ、き久…あきひ…う、ふぇ、うえぇ～～～～～ん》

こうして、私に新しい家族が出来ました

プロローグ（後書き）

次はいよいよ本編です

～キャラ紹介？～

名前：吉井　幽乃

性別：女

種族：幽霊

身長：推定１６０ｃｍ

体重：幽霊だからありません♪

容姿：幽霊なので肌は青白いが、黒髪をおかっぱ頭にし、瞳の色は黒い

好きなもの（こと）：明久・友達・ぬいぐるみ

嫌いなもの（こと）：明久と友達をいじめ、傷つける人（島田＋ＦＦ団）・塩

服装：基本的にセーラー服姿（明久達が調べたところ昔の旧校舎の制服であることが判明）だが

時々どうやっているのか、ナース服や巫女服を着ることがある

備考：明久が一年のときに旧校舎の屋上で会い、名前を付けてそのまま家族になる

いつもぬいぐるみに憑いており、周りには最新型のぬいぐるみ型ロ

ボットと言って誤魔化している

幽乃の正体に気付いているのは明久、瑞希、翔子、西村教諭、学園長だけである

～キャラ紹介？～（後書き）

次からはいよいよ本編です

では、お楽しみに♪

第一話（前書き）

お気づきの人もいると思いますが、
幽乃のセリフは《》で書いていきます。

第一話

《……懐かしい夢だな…》

朝日が射し込むリビングで私は目を覚ました。

《明久を起こさなきゃ……》

私は飛びながら明久の寝室に向かった。
なぜ、飛べるかって？
私、吉井　幽乃は幽霊だからだよ。
ん？幽霊なのに寝るのはおかしい？
余計なお世話だね♪

《明久～朝だよ～》

寝室の壁をすり抜けて、明久の体を揺すった。
なんで明久に触れるかというと、どうやら明久は霊感が強く、触れることも出来るんだそうだ。
これは学園長から聞いたんだけど……なんでそんなこと知ってるんだろ？

「ん、幽乃？」

《おはよう明久、もう朝だよ？》

「そうだね、なら、着替えるから出てくれる？」

《わかった♪》

私が部屋の外に出て、少し経つと明久が制服姿で現れた。
そして、朝食をすませると明久は学校へ行く準備をした。

「じゃあ、幽乃？」

《分かったよ♪》

私は明久が持っているテディベアの中に入った。
実は私、学校では最新型のロボットってことになってるんだ。
他にもぬいぐるみがあるけど、一番のお気に入りは白猫のぬいぐるみかな？
だって、明久からの最初のプレゼントだもん♪

「それじゃあ行こうか？」

《うん♪》

こうして、私たちは学校に向かった。

「おはようございます。鉄じ……西村先生」

《おはようございます。西村先生》

「おはよう吉井兄妹。それと吉井兄、今、鉄人と言わなかったか？」

「ははっ、気のせいですよ」

「ん？そうか」

この肌が黒く筋骨隆々の人は、補習担当の西村　宗一先生だ。
私が気に入っている先生の1人なんだ。
だって、私の正体を知っても逃げたりしないで変わらずに接してくれるんだから。
ちなみに鉄人っていうのは、西村先生のあだ名でトライアスロンが趣味ってところからついたみたい。
あと、なんで兄妹かというと、周りからは最近できたロボット＋女の子＝妹っていう式が出来ているみたい。

「ほら、クラス分けのだ」

そう言うと西村先生は明久に封筒を渡した。

「何処なのか分かっていますけどね」

「しかし、一年の後半から成績が上がり始めて、一年の終わりにはAクラスも取れるところにまできていたのに残念だったな」

《気にしないで下さい。あれは、明久が決めたことなんですから》

「そうか、まぁ、頑張るように」

「《は～い！》」

私と明久は返事をして教室に向かった。
向かっている最中に明久は封筒を破いて中の紙を取り出して見た。

吉井　明久　　Ｆクラス

今年も楽しくなりそうだな♪

第二話

「ねぇ、時間まだあるから、Ａクラスでも見ていこう」

《うん、いいよ》

ＨＲが始まる前に私と明久はＡクラスに向かった。

「すごいね……」

Ａクラスを見た明久の言葉に私は頷いた。
まぁ、私は何度も見てるけどね。
でも、流石にこれはやりすぎじゃないかな？
何処かの高級ホテルを思わせる装飾ばかりだよ。
あ、Ａクラスに入った子が気絶しちゃった。

「Ａクラスがこれだとｆクラスはどんなんだろうね」

《さ、さぁ……》

言えない……ｆクラスの教室は知ってるけど言えない！

「うん、帰ろう」

《明久！帰っちゃダメだよ》

「いやだ！こんなオンボロ小屋が教室なわけがない！はっ！そうか、これは夢だ。夢なんだ！」

《明久！現実逃避しないで！》

「……なに漫才やってるんだ？」

《あ、雄二くん！》

話しかけてきたのは、明久の親友（明久は悪友って言ってたな）の坂本　雄二くんです。

「雄二、おはよう」

「それでどうしたんだ？」

《あまりの教室のひどさに明久が現実逃避してたんだよ…》

「確かにひどいな……」

雄二くんも苦笑してたよ。

今度、カヲルさんに言ってみよ。

カヲルさん、学園長だからね。

「皆さん、おはようございます。このクラスの担任になる、福原慎です。」

時間は経ち、ＨＲが始まりました。

「それでは廊下側の人からは自己紹介をして下さい」

「木下　秀吉じゃ。演劇部に入っておる」

あ、秀吉くん。
とても、綺麗な顔立ちです♪
女の子みたいですね。
え？女の子じゃないのかって？
だって……

「言っておくが、ワシは男じゃ！」

そう男の子なんですよね。

「……土屋　康太」

つぎは康太くんです。
割と去年のクラスメイトがたくさんいますね。

「～～～です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。あっ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので、趣味は……」

あれ？女の子もいたんですね。
誰なんで、

「吉井明久を殴ることです☆」

……要注意です。
明久の友達の中で要注意人物の島田　美波さんです。
明久に暴力を振るうこと数々、何度か驚かして（幽霊的な意味で♪）やりましたが、
まだ懲りてないみたいですね……
ほら、明久が震え出しました。

「え～」

明久の番ですね♪

「吉井　明久です。気軽に『ダーリン』と呼んでください」

ち、ちょっと／／／
いきなりなにを言い出すの！？／／／

『『ダァーーリィーーン！！』』

……気持ち悪いです。
明久も気持ち悪いのか顔色が青くなってますね。

よし、ここは

《次は私だよ♪》

私が空気をかえよう！

《ロボットの吉井　幽乃です。学生じゃありませんが仲良くして下さい。気軽に『ユノちゃん』って呼んでね♪》

『『ユノちゃ～～ん！！』』

《はーい♪》

『『かぁ～わい～～い！』』

さっきよりは空気が和みましたね。

「ありがとう幽乃」

《大丈夫だよ。だ、ダーリン／／／／》

きゃ、言っちゃった♪

ガラッ！！

「す、すみ、ません。遅れ、てしま、いました」

『『『『え？』』』』

いきなり教室に女の子が入ってきました。
あれって……

《瑞希？》

そこには私の親友、姫路　瑞希さんがいました。

第三話

なんで瑞希がいるんでしょうか？
Ａクラスほどの実力があるのに？
あ、確か体調を崩して途中退席したんでした。
明久もその付き添いで途中退席になり、無得点扱いでＦクラスになったんでしたね。
私はその事を帰ってきた明久から聞きました。

「こ、今年一年よりょ……よろしくお願いします／／／」

噛みましたね…
真っ赤になりながら瑞希がこっちに来ました。

「緊張しました～」

「瑞希ちゃ」

「姫j」

《み～ずき～♪》

？二人も瑞希に話しかけようとしたような、気のせいですね♪

「え？幽乃ちゃん？」

「おはよう、瑞希ちゃん」

「あ、明久くん！／／／」

あらあら今頃、気付いたんだ。

「明久がブサイクですまんな」

「そ、そんな！えっーと…」

「代表の坂本　雄二だ」

「あ、よろしくお願いし……それより！明久くんはブサイクじゃありません！目もパッチリしてて顔のラインも細くて綺麗だし……そのむしろ……」

そうそう明久は顔は整ってる方だよね。
それより瑞希？今近くに明久がいること忘れてない？

「まぁ、悪くはないな。……そういや興味がある奴もいたな」

「え？誰？」

「そ、それって誰ですか！？」

瑞希がすごい慌てようだよ。

「確か……久保…」

久保さんですか？
でも、この学年にいる久保って……

「……利光だったかな」

……新情報です。
これは警戒しないといけませんね…
今、言われたことに明久がショックを受けていますよ。

バンバン

「はいはい、そこの人たち静かに」

バキッ！

ガラガラ！

「「「……」」」

……ひどいです。
先生も軽く叩いたんでしょう。
いきなりのことにみんな固まってしまいました。

「え～替えを用意してきますので、自習をしててください」

先生が教室を出て行ってしまいました。

「雄二、ちょっといい？」

「あ？どうした？」

「此処じゃなんだから廊下で」

明久と雄二くんもこっそりと廊下に行ってしまいました。

「えー坂本君、クラス代表の君が最後です。前に出てきてください」

あの後も自己紹介は続いていき、雄二くんで最後です。

「了解」

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

「さて、皆に一つ聞きたい」

そう言うと雄二くんは教室に視線を移していきます。

みんなの視線も自然とそれを追っていますね。

すき間風が通る教室。

古く、うす汚れた座布団。

汚れて脚もガタガタな卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい

が……」

「……不満はないか？」

『『『大有りじゃあッ！！！』』』

魂からの叫びですね。

「だろう？俺だってこの現状に不満を抱いている」

『いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！』

『Ａクラスだって同じ学費だろ！？』

『改善を要求する！！』

「そこで代表としての提案だが、Ｆクラスはクラスに対し試験召喚戦争を仕掛けようと思う！」

こんな早い試験召喚戦争は私が観てきた中では初めてですね。

第三話（後書き）

次回は勝てる要素を発表します。

明久の成績が！？

第四話

『そんなの勝てるわけがない』

『これ以上、設備が落ちたらどうするんだ』

『姫路さんがいたら何もいらないい』

みんなから反対の声があがってるけど、最後の関係ないよね？

「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

『無理に決まってる』

『何を根拠にそんなことを…』

「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二くんが自信有りげにそう答えました

「それを今から証明してやる！」

「おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いているんだ。ちょっと前に来い」

「……！」

康太くんは素早く立ち上がって首を横に振っています。

けど、頬に畳の跡が残っていますよ？

「はわっ／／／」

瑞希は素早くスカートを押さえましたが、遅いですよ。

「土屋康太　こいつがあの有名な寡黙なる性職者（ムッリーニ）だ！」

そういうと康太くんはさっきよりも早く首を横に振ってます。

『馬鹿な……奴がそうだというのか！？』

『だが見ろ！まだ証拠を隠そうとしているぞ』

『あぁ、あれこそムッツリの名に恥じない姿だ』

確かに康太くんにはムッツリーニなんて二つ名がありましたね。

瑞希が首を傾げています。

純粋なんです。

そのままでいてくださいね。

「それに姫路の事は皆もその実力をよく知っているはずだ」

「え？私ですか？」

そうなのです。

瑞希は学年トップ１０にはいるほどの実力があるのです。

「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

『そうだ！俺達には姫路さんがいる！』

『彼女ならＡクラスにも引けをとらないぞ！』

「それに木下秀吉だっている」

「ワシもか？」

『演劇部のホープ』

『確かＡクラスに姉が……』

「そのほかにも島田もいる」

「えっ、ウチ？」

「島田は数学だけならＡクラスにも匹敵するだけの実力がある」

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ』

『確かになんかやれそうな気がしてきたぞ！』

『これはいけるんじゃないか！？』

すごいです！

今、教室の士気が高まっていますよ！

「それに吉井　明久だっている」

明久も出ましたよ！
これなら士気が最高潮に達しますよ！

シーン

あれ？

『誰だ、吉井　明久って？』

『あれだろ？人形、持ち歩いてる可哀想な変態』

『あいつか…』

「ちょっと、可哀想な変態ってなに！？それに雄二！なんでそこで僕の名前を出すのさ！さっきまでの士気を返して！」

「そうか、お前たちは知らないんだな」

「こいつの肩書きは『観察処分者』だ！！」

雄二くんはそう言いきったけど、それは……

『観察処分者って馬鹿の代名詞じゃなかったか？』

そうなんです…

「ち、違うよ！ちょっとお茶目な１６歳の愛称なんだよ！」

明久は慌てて否定してますが、

「そうだ、馬鹿の代名詞だ！」

「肯定するなバカ雄二！」

「あのそれってどういうものなんですか？」

瑞希が雄二くんに尋ねました。

「観察処分者っていうのは具体的には教師の雑用係だな。
主に力仕事とかの雑用を物に触れるようになった召喚獣でこなすんだ」

「それって凄いですね！」

瑞希が目をキラキラさせながら明久を見る

「だが、デメリットもある。
召喚獣が受けた痛みや負担の何割かはフィードバックされて本人にもくる」

『……それならおいそれと召喚できないヤツがいるって事になるじゃないか？』

「そうだが、気にするな！明久はいてもいなくても大して変わらん雑魚だ」

雑魚と言い切りましたね雄二くん。

《明久は雑魚じゃないもん！》

「ゆ、幽乃？」

私がいきなり喋ったことに明久は驚いてしまいましたが、気にしません。

《明久はこのなかで瑞希の次に頭が良いんだぞ！》

「はあ？おいおい吉井妹、バカな明久が姫路の次に頭が良いわけないだろ？」

「あの坂本くん？本当に明久くんは頭が良いですよ？」

「？どういうことだ姫路？」

「だって、私と翔子ちゃんが手取り足取り教えたんですから♪」

あ、瑞希、それは……

『総員狙え！！』

いきなり皆さんカッターを構えましたよ！

「えぇ！なんでカッターを構えてるの！」

『黙れ！異端者が！血祭りにあげてやる！』

『女子二人と楽しく勉強会だと！』

『しかも、手取り足取り腰取り教えてもらっただと！』

『……許せん！』

『『『『覚悟しろ！！』』』』

大変です！
皆さん怒っています！
といいますか、なかに不穏当なものもありましたが…

「皆さん落ち着いてください！」

「そうじゃぞ！」

瑞希と秀吉くんが明久の前に立ちました。

『ちくしょう！女子二人に守られやがって！』

『くそ、今回だけは勘弁してやる…』

「ワシは男じゃぞ！！」

秀吉くんも苦労してますね…

「まぁ、いろいろあったが…、とにかくだ！俺達の力の証明として、まずDクラスを制圧しようと思う」

雄二くんが仕切り直してますね。

「みんな、この境遇に大いに不満だろう？」

『『『当然だ！！』』』

「なら全員、筆（ペン）をとれ！出陣の準備だ！」

『『『『おぉ～～～～！！』』』』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Ａクラスのシステムデスクだ！」

『『『『打倒Ａクラス！！』』』』

こうして、第一次試験召喚戦争が始まりました。

第五話（前書き）

Dクラス戦前の作戦会議を省きます。

いよいよDクラス戦です！

ノッポガキさん、感想ありがとうございます！

第五話

『うおぉ～～～～！』

只今、Ｄクラス戦が始まっています。
あのあと、雄二くんが明久に宣戦布告に行かせようとしましたが、
私と瑞希の説得により須川くんが逝きました。
実際には私と瑞希が宣戦布告に行くと言いました。え？脅迫？違いますよ♪
そのあと午後になり戦争は始まりました。

「……そろそろだな」

？なにがでしようか？
ちなみに私は教室にいます。
明久と瑞希は回復試験に行ってしまいました。
私って、生徒じゃないので召喚獣出せないんです。
……そもそも幽霊の私が召喚、出来るんでしようか？

《雄二くん、そろそろってなに？》

「島田の部隊が臆病風に吹かれて後退し始めてるはずだ」

《え！？どうするの？》

「こうするさ……おーい！誰かこのメモを島田の部隊まで行って、
読み上げてくれ！」

そう雄二くんが言うとひとりの生徒がそれを持って、教室から出て

行きました。

《雄二くん、なにを書いたんですか？》

「まぁ、大人しく聞いてみろよ」

雄二くんがそう言いましたので、聞き耳を立てていますと…

『そ、総員突撃よ！』

島田さんの叫び声が聞こえました。

一体、なにが書いてあったんでしょうか？

『坂本！』

「ん？どうしたんだ？」

『島田からの伝言で先生方に偽情報を流して欲しいそうだ！』

「……Dクラスはどの先生を呼んでるんだ？」

『確か……船越先生だったはずだが？』

「そうか…」

雄二くん？
嫌な笑みを浮かべてますよ？

「よし、明久が体育館裏で待っていると校内放送で伝えてくれ」

な、なんですって！
ふ、船越先生といえば…
婚期を逃してしまい、単位を盾にして生徒にまで手を出そうとする
恐ろしい先生ですよね…

《雄二くん、そんなことしないよね？》

「これは作戦に必要なことなんだ」

《雄二くん…》

「いや、だからな…」

《……（；＿；）》

「……予定変更だ。明久ではなく偽名を使ってくれ。あの先生なら偽名と知っても行くはずだ」

『あぁ、分かった！』

そうして、その生徒は放送室に向かって行きました。
雄二くん、ありがとうございます♪

ピンポンパンポーン！

『連絡いたします。船越先生、船越先生。Ｆクラスの文月左門くんが体育館裏で待っています。生徒と先生の垣根を越えた話がしたいそうです』

放送の後、戦場の方からにわかに騒ぎ出しました。

『ちょっと！船越先生、何処に行くんですか！』

『今は戦争中ですよ！』

『あれは明らかに偽名ですよ！』

『ええい！放しなさい！若いあなた達には分からないのよ！！待ってなさい左門くん！！！』

『あ！船越先生～～！！』

……本当に明久じゃなくて良かったです……

そのあと雄二くん達の本隊も向かい、しばらく経った頃……

『戦争終了！勝者、Ｆクラス！』

という声が響きました。

でも、私ひとり教室に残されて寂しいです…

第六話

《あっきひさ～♪》

「わっ!?と、どうしたの幽乃?」

Dクラス戦の戦後対談を終えた明久達が帰ってきたので、私は明久に飛びつきました♪

《ひどいよ明久、私だけ置いていくなんて～～》

「あはは、ごめんね。でも、次の戦争の時も教室で待っててね」

《そんな～～》

「帰ったら、いっぱい遊んであげるからね」

《ぶ～～、分かった…》

ひとりで待ってるのは寂しいけど…

明久が遊んでくれるんならいいか♪

《それじゃあ、帰ろう?》

「うん、そうだね」

「あ！」

《どうしたの？》

正面玄関まで来ると明久が驚いた声をあげました。
どうしたんでしょうか？

「教室に筆記用具を忘れたみたい」

《も～しょうがないな明久わ》

再び私達は教室に入りましたが、

《あれ？瑞希？》

なんと瑞希が残っていました。

「あ、あ、明久くんにゆ、幽乃ちゃん。ど、ど、ど、どうしたんですか？」

……何か知りませんが、すごい慌てようです。
おや？卓袱台の上に何かありますね。
あれは、手紙でしょうか？

「どうしたの瑞希ちゃん、そんなに慌てて？」

「な、なんにもありま…」

ドタッ

「あぅ」

瑞希が慌てて立ち上がったところ、卓袱台にぶつかり転んでしまいました。
大丈夫でしょうか？

「ん？なにこれ？」

明久の足元に瑞希の手紙？がきましたね。
なんて書いてあるんでしょう？

『あなたが好きです』

……

《明久》

「？なに、幽乃」

《その手紙、私に貸して？》

「いいよ、はい」

《ありがとう。あと、瑞希と話があるから正面玄関で待っててくれる？》

「わかったよ」

《ちなみに……》

「？」

《手紙の内容って見ましたか？》

「……見てないよ」

嘘ですね。
明らかに目が泳いでいますよ？
あ、出て行ってしまいました。
さて…

《瑞希》

「ゆ、幽乃ちゃん」

《はい、これ》

私は手紙を渡しました。

「……幽乃ちゃん」

《？なに》

「明久くんはこの手紙を見ちゃいましたか？」

《……たぶん、見たと思うよ》

「！」

瑞希は驚いた後、目に涙が溜まり始めました。

「こんな形で見られたくありませんでした……」

《瑞希……どうせ明久のことだから、瑞希が他の人に宛てた手紙だと思ってるよ…》

「……そうですね。明久くんですもんね…」

二人そろって溜息が出てしまいました。

《瑞希、去年に私が言ったこと覚えてる?》

《私は瑞希の恋を応援するって》

《私達は親友なんだからって》

「覚えていますよ」

瑞希がさっきまでの泣き顔からきれいな笑顔に戻りました。

《明久は鈍感だけど、頑張ろうね♪》

「はい♪」

私と瑞希は握手をして笑っていました。

《おまたせ～♪》

あのあと、瑞希と別れて急いで明久の元に向かいました。

「瑞希ちゃんと、なにを話してたの？」

《女の子同士の秘密の会話だよ♪それより明久、早く帰ろう？》

「分かったよ」

私たちは仲良く帰宅しました。

第七話（前書き）

ノッポガキさん、感想ありがとうございます！

いよいよ姫路の弁当が明らかに！

第七話

キーンコーンカーンコーン

四時間目の終了のチャイムが鳴りました。
鳴ったと同時にほとんどの人が卓袱台に突っ伏してしまいました。
今日は昨日の戦争の回復試験をしています。
生徒じゃない私は結構、暇でしたね…

「よし、昼飯を食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

雄二くん、流石に食い過ぎじゃない？

「あの、皆さん」

「ん？どうしたんじゃ、姫路よ？」

「お弁当を作ってきたんですけど一緒に食べませんか？」

「え？いいのウチ達まで？」

「はい、ちょっと多く作りすぎてしまって」

そういって瑞希はお弁当を取り出したんだけど……
なんで重箱？

「せっかくのご馳走じゃし、教室ではなく屋上にでも行くかの？」

「そうだな、だったらお前ら先に行っててくれ」

《雄二くん、用事でもあるの？》

「違う違う、飲み物を買ってくるだけだ」

「なら、ウチも行くわ。一人じゃ持ちきれないでしょ？」

そういって二人は教室をあとにしました。

「それじゃあ行こう。瑞希ちゃん、お弁当は僕が持つよ」

「ありがとうございます。明久くん」

うんうん、仲が良いね♪

そのあと、明久達と屋上に行って、しばらくして雄二くん達も来ました。

「はい、食べてみてください♪」

「「「「おぉ！！」」」」

みんな驚きの声をあげました。

当然ですね。

なんたって、そこには色とりどりのおかずがあって、ご飯なんかパエリアなんだから。

「これはおいしそうじゃの」

「すごいわね、瑞希」

「……美味そう」

「よくこれだけの量を作ったな」

「はい、朝の四時半から作りましたから」

「早過ぎじゃない！？」

流石に早く起きすぎだよ、瑞希…

「こんなに美味しくなるなんて霧島さんに感謝だね」

「？なんでそこで翔子の名前が出るんだ？」

「瑞希ちゃん、前まで料理に薬品を平気で混ぜる人だったんだよ？」

ビキッ

あっ、みんな固まりましたね。
おっ、今度は箸を置いて下がり始めました。

「た、食べても大丈夫なんだろうな？」

「なに言ってるのさ雄二。今、食べたばかりじゃない」

「でもよ…」

《それに言ったじゃん、翔子のおかげだって》

《去年、明久と翔子が瑞希に一から料理を教えたんだよ》

「え？吉井も料理出来るの？」

「明久は一人暮らしだからな。今はロボットがいるが、家事全般はこなせるぞ」

「けど、あの時は大変だったな……」

《そうだね……いくら注意しても目を離した隙にすぐに薬品を入れようとするんだもん。止める方は気が気じゃなかったよ……》

「去年あいつが時々、疲れた顔をしてた意味がようやく分かったよ……」

そうなんだよね…

味見を瑞希がしないのもあって、翔子が倒れたときは本当に焦ったよ…

「ところで雄二よ」

「なんだ秀吉？」

「霧島とは仲がいいのかの？」

「あぁ、あいつとは幼なじみだ」

まずいです。

ヒュッ！

ダスッ！

「うおぉ！なにしやがるムッツリーニ！」

「……うらやましい」

血涙を流しながら言わないでよ、康太くん…

「落ち着いてムッツリーニ！」

「そうですよ、土屋くん！」

明久と瑞希が康太くんに抱きつきましたって…

瑞希！あなたが抱きつくと！

「！……（ブシャャャャ！）」

「わぁ！ムッツリーニ！」

「しっかりしてください！土屋くん！」

「……か、感無量（バタッ）」

「ムッツリーニ！！！（号泣）」

「土屋くん！！！（号泣）」

「……なんだあのコントは？」

《さぁ、私にも分かりません……》

とりあえず、逝きかけた康太くんを戻して作戦会議をしてお昼は終わりました。

第七話（後書き）

次回からはＢクラス戦です。

第八話（前書き）

怪現象がおきます。

ご注意ください。

第八話

いよいよBクラス戦が始まりました。
私は毎度の事ながら教室でお留守番です……
お昼休みの時、また明久を宣戦布告の使者にしようとした雄二くん。
私達の説得（前回みたいなことしました♪）により、今度は横溝くんが逝ってくれました。
え？前回も今回も漢字が違う？
気にしたら負けですよ♪

『失礼する。Fクラスの代表はいるか？』

いきなり誰か入って来ましたよ？

「代表は俺がなんだ？」

『Fクラスと停戦協定を結びたいから一緒に着いてきてくれ』

「……待ち伏せじゃないよな？」

「大丈夫だ。だから、こうして先生を証人として連れてきた。」

「……分かった。着いていこう、他のヤツも来てくれ」

雄二くんは教室にいた人達と行ってしまいました。
あれ？また、置いてかれた？
……寂しいな、ｏｒｚ
仕方ありません。大人しく待つことにしますか。

ガラッ

？随分、早いですね。
もう、終わったんでしょうか？

『おい、大丈夫なんだろうな？』

『あいつの作戦だ。大丈夫じゃないか？』

『まあ、失敗しても。あいつの所為にすればいいだろ？』

『そうだな』

誰なんでしょうか？
Fクラスの生徒じゃありませんね

『とにかく、とっととやるぞ！』

そういうとその人は手近にあった卓袱台を壊しましたって…

《いきなり、なにするの！？》

『おわ！なんだこれ？』

『気にせずさっさとやろうぜ！』

さらに卓袱台や勉強道具を壊していきます。

《やめて！》

『これ結構楽しいな！』

《やめ…》

『あぁ、やめれねぇな！』

《……》

『『『『ハハハッ！！』』』』

《……止めてって言ってるでしょう？》

『『『『！？』』』』

……もう許さないんだから

～Ｎｏ　ｓｉｄｅ～

最初に男子生徒達が気付いたのは温度だった。

春先とはいえ、連日晴れ間が続いたため比較的に暖かい温度であった。

当然、Ｆクラスですきま風が吹くとはいえ、さっきまでは暖かい温度だった。

そう、さっきまでは…

『おい、なんか寒くないか？』

『あぁ、確かに』

『みろ、息まで白いぞ』

だんだんと温度が下がり、男子生徒達は震え始めた。

カタカタッ

『『『『？』』』』

ガタガタッ！

『『『『！？』』』』

音が鳴り始め、男子生徒達は振り返り、驚愕の顔をした。

そこには…

今まで自分達が壊した卓袱台や教科書、筆記用具などが浮かんでいた。

《……言ったよね》

ふと声が聞こえた。

慌てて声がした方を向くと…

さっきまでいたウサギのぬいぐるみが浮きながら男子生徒達を睨みつけた。

『な、なんなんだよアレ！』

『知るわけないだろ！』

《私は壊さないでって言ったよね？》

『気にするな！こんなのただの見せかけ』

ヒュッ

ドスッダスッ！

『ひっ！』

男子生徒達のひとりが落ち着かせようとしたが、

その足下に卓袱台の木片やペンなどが突き刺さった。

《私は言ったよね？やめてって？》

『『『『（コクコク）』』』』

男子生徒達は震えながら、壊れた人形のように首を縦に振り続けた。

《もし、今度やったら…》

『『『『（ガタガタッ）』』』』

《殺すよ？》

『『『『！！？？』』』』

バタバタッ

そのまま男子生徒は気絶してしまった。

のちに男子生徒達は語る…

Ｆクラスには幽霊がいると…

～Ｎｏ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

「む、これはひどいの…」

《あ、明久に秀吉くんお帰り》

「幽乃だけかの？雄二たちはどうしたのじゃ？」

「この人達は？」

《雄二くんは停戦協定を結びにいったよ、この人達は犯人さん》

「Ｂクラスの生徒かの」

「やっぱり、根本くんの命令だよね」

《根本くんって、あの毒キノコ？》

「そう、あのキノコ頭の根本くん」

あの毒キノコですか？
カンニングは常習犯、喧嘩の時には常にナイフを常備と卑怯の名にふさわしい奴ですね。

《この人達どうしようか？》

「とりあえず、鉄人を呼ぼうか」

ボクッ

「あいた！」

「西村先生と呼ばんか！」

《あれ？西村先生、どうして此処に？》

「ワシが呼んできたのじゃ」

秀吉くんが呼んできたんですね。
いつの間に行ったんでしょう？

「それで、これはどういうことだ？」

《それはですね》

私は今までの事を話しました。
能力を使ったことは秘密にして、気絶したのは私が声を掛けたところ、たまたま、足下にあった教科書で全員、転んでしまったことにしました。

「そうか、分かった。たっぷりと事情を聞くことにしよう」

そのまま西村先生は男子生徒を連れてってしまいました。

「幽乃」

《なに、明久?》

どうしたんでしょうか?

「恐かったんでしょう?」

《!》

……恐かった。
確かに恐かったよ。
人形を切られたり踏まれたりしても痛くはないけど
ひとりは……
ひとりは恐かったよ

「ほら」

明久が腕を広げています。

《明久!》

私は明久の胸に飛びつきました。
しばらくは明久の胸のなかにいました。

第八話（後書き）

これが世にいうポルターガイストか！

よく、分かりませんが

第九話（前書き）

まあさん、感想ありがとうございます！

第九話

「なに、Cクラスの動きが怪しい？」

今は停戦中です。
あのあと、島田さんが人質に捕られたり（自業自得ですけどね…）
といろいろありましたが、
また、トラブルでしょうか？

「大方、漁夫の利を狙っておるのじゃろう」

「ところで、Cクラスの代表って誰なの？」

「……こいつだ」

康太くんが一枚の写真を渡しました。
と言いますが、なぜ持ってるの？

《明久、見して見して♪》

「はい」

《ありがとう♪》

さて、どんな子なんだろうな。
あれ？この子って…

「しょうがない、Cクラスにふか《ねぇ、雄二くん》？どうしたんだ、幽乃？」

《あのね確証はもてないけど、この子、確か毒キノコの彼女だよ？》

「「「なに！！」」」

皆さん驚いてますね。

「そうか罠をな……面白いからのってみるか」

「え、行くの？」

「恐らく根本は教室の何処かに隠れている。それでこっちがＣクラスと交渉したのを協定違反だとかいって襲いに来るはずだ。そこを逆手に取る」

「それじゃあ、Ｃクラスも敵になるってこと？」

「そうなるな。まぁ、そっちは考えている。今はＣクラスに行くから残っているヤツは来てくれ」

そういって、他の人達と一緒に行ってしまいました。

あれ？また一人だ…ｏｒｚ

「今から作戦を実行する！」

翌日です。
昨日のあの後、雄二くんが得意の話術？でＢクラスの人達を何人か補習室送りにしたそうです。
ご愁傷様。

「でも、まだ始まっていないよ？」

そうですよね。

「Ｂクラスじゃないｃクラスの方だ」

「あ、そっちね。それで何するの？」

「秀吉にコレを来てもらう」

そう言って、雄二くんはそばにあった紙袋から女子の制服を取り出したんですけど…

《ゆ、雄二くん／／／そんな趣味があったの？／／／》

「待て幽乃、お前は何か勘違いしている！」

「そうだよ幽乃、あれは雄二の性癖だよ」

「それも違うからな！！」

あ、違うんですね。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

抵抗しましょうよ。秀吉くん…

「秀吉には木下優子として、Ａクラスの使者を装ってもらう。と言う訳で秀吉、用意してくれ」

「う、うむ。分かったのじゃ」

雄二くんから制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉くんですが、

女子がいること忘れていませんか？

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうしたのじゃ？」

「さぁな？行くぞ」

こうして、明久と雄二くんと秀吉くんは行ってしまいました。私？

私は毎度の事ながら留守番ですよ。

《？》

なんか瑞希の様子がおかしいですね？

何か嫌な予感がします…

「ただいま」

数分後、明久達が帰ってきました。

《どうだった？》

「なんというか……」

その時の様子を聞いた私は、すぐに秀吉くんの所に行きました。

《ねぇ、秀吉くん？》

「どうしたのじゃ幽乃？」

《優子ちゃんに知られたら、怒られるんじゃないの？》

あ、しまったという顔をしていますね。

だんだん顔が青くなってきました。

「幽乃、短い間じゃったが楽しかったぞい」

《……秀吉くん、謝るときは私も一緒にいるからね…》

「かたじけないのじゃ……」

二人そろってため息をつきました。

第十話

「雄二っ！」

Bクラス戦が再開されてから、しばらくすると明久が戻ってきました。
どうしたんでしょうか？

「うん？どうした明久？脱走か？チョキでシバくぞ」

「話があるんだ」

「……とりあえず、聞こうか」

いつになく真剣な顔ですね。
なにか重大なことでしょうか。

「根本くんの着ている制服が欲しいんだ！」

……

「……お前に何があったんだ？」

ごもっとも。

「ち、違うんだよ！これにはいろいろあって……」

「それだけか？」

「あと、瑞希ちゃんを戦闘から外してほしいんだ」

え？瑞希を？

やっぱり、なにかあるんですね…

「理由はなんだ？」

「理由は言えない」

「どうしても外さないとダメなのか？」

「どうしても」

「……」

「頼む、雄二！」

《あ、明久？》

明久がいきなり土下座しました！

「……分かった。ただし条件がある」

「条件？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛けろ。科目は何でもいい」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今のままだ」

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させろ」

これは難題ですね…

「それじゃあ、うまくやれよ」

《え？雄二くん、どこか行くの？》

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

「明久」

雄二くんは教室から出ようとしたとき、振り向かずに話しかけてきました。

「お前にはお前の秀でている部分がある。だから、俺はお前を信頼している」

「雄二……」

「まぁ、しっかりやれよ」

そのまま、雄二くんは教室から出て行きました。

～明久　ｓｉｄｅ　～

《明久…》

雄二が教室から出て行った後、幽乃が話しかけてきた。

「どうしたの幽乃？」

《瑞希になにかあったの？》

多分、僕の顔は苦虫を噛んだようになっているんだろう。

「実はね……」

僕は瑞希ちゃんの手紙を根本が持っていること、それをネタに脅していることを話した。

パチンッ！バチンッ！

「ゆ、幽乃？」

突然の音に僕は驚いた。

これって、よく幽霊がやるラップ音だよね？

《フフフフッ》

こ、恐いよ！

人形の後ろから黒いのが見えるよ！

《……明久》

「は、はい」

《私にも手伝わして…》

「え？」

《だって……だって、私は瑞希の親友だもん！！私の大切な……大切な！！》

「幽乃……」

《お願い、明久…》

「分かったよ。一緒に行こう！」

「うん！」

こうして僕は幽乃と戦場に向かった。

～明久　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第十話（後書き）

次回、Ｂクラス戦、決着！

第十一話（前書き）

Bクラス戦　決着です

第十一話

『お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないな』

隣から毒キノコの声が聞こえてきます。

《明久、そろそろ》

「うん！」

ドンッ！ドンッ！

『どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

『はぁ？ギブアップするのはそっちだろ？』

ドンッ！ドンッ！

『無用な心配だな』

『そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

……この毒キノコが…

ドンッ！ドンッ！

『お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ』

『けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよぉ』

『負け組？それがＦクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

ドンッ！ドンッ！

『さっきから壁がうるせぇな。何かやっているのか？』

『さぁな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

ドンッ！ドンッ！

『けっ。言ってろ。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

『……態勢を立て直す！いったん下がるぞ！』

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

ドンッ！ドンッ！

『あとは任せたぞ、明久！』

午後三時ジャストです。

《いっけー、明久！》

「だぁーーっしゃーーっ！」

ドガンッ！ガラガラ

「くたばれ、根本恭二ぃーっ」

明久と他の遊撃隊の人達がBクラスにのりこみました。

「んな！」

「いくぞ！Fクラス、吉井が…」

「Bクラスの山本が受けます！試獣召喚（サモン）！」

「近衛部隊か！」

「なめやがって！」

毒キノコが手紙を！

《明久！私を毒キノコに投げて！》

「え？でも」

《はやく！》

「分かった！いくよ！」

《幽乃、いっきまーす！》

「それ、パクリだから、ね！」

明久が召喚獣で思いっきり投げてくれました。

パシッ！（手紙を掴む音）

「あ、この野郎！」

《きゃ！》

私は手紙を持ったまま床に叩きつけられました。

「邪魔しやがって！」

《！》

毒キノコが足を振り上げました。
踏まれる！

ダンッ！ダンッ！

ビュンッ！

ギュッ

《え？》

「なに！」

私は毒キノコの足下にいたはずですが、
いつの間にか抱き上げられていました。
私は抱き上げてくれた人を見ました。

それは…

《康太くん…》

私の友達でした。

「……Ｆクラス土屋康太が」

「き、貴様は……！」

「Ｂクラス根本恭二に保健体育で勝負を申し込む」

「ムッツリィーー二ッ！」

「……試獣召喚（サモン）」

『Ｆクラス　土屋康太

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二

保健体育

４４１点　ＶＳ　２０３点』

康太くんが一刀のもとに毒キノコを両断してＢクラス戦は終了しました。

第十一話（後書き）

毒キノコ（笑）には恐怖体験をしてもらいます。

第十二話（前書き）

恐怖体験をうまく書けたか不安です…

第十二話

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

さっきまでの威勢がありませんね、この毒キノコ。

「本来なら設備を明け渡してもらい、素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

え？どうして雄二くん。
他の人も不満気味ですよ。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はＡクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うん。確かに」

「だから、Ｂクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

「……条件はなんだ」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目

障りだったんだよな」

確かにそうですね。

周りの人達もフォローをするどころか、納得してる感じがします。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行って、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

「ああ。Bクラス代表がコレを着て行った通りに行動してくれたら見逃そう」

雄二くんは、さっき秀吉くんが着ていた女子の制服を取り出しました。

《やっぱりそういう趣味が…》

「違うわ！」

「そうだよ。あれは…」

「違うって言ってるだろ！」

まぁ、人それぞれですしね…

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを…！」

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

慌てふためく毒キノコをよそに、Bクラスの人達が賛同してくれました。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態（ドガッ！）ぐふぅっ！」

『とりあえす黙らせました』

「お、おう。ありがとう」

見限りましたね。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解！」

《明久》

「なに？」

《私、さきに教室に行ってるね》

「うん、わかったよ」

《それと毒キノコの制服、脱がせ終わったら私に貸して》

「いいけど、どうするの？」

フッフッフッ

《ちょっと恐怖体験を味わってもらうために旧校舎の理科準備室に置いとくだけだよ♪》

「理科準備室って……人吉さんとお骨さん？」

《うん、おじいちゃんとおばあちゃんに手伝ってもらうの♪》

トラウマを植え付けてあげますよ。

「分かったよ。けど、それじゃあ生ぬるいから制服は理科準備室にあるってことにして、制服自体は捨てようか♪」

《それもいいね♪》

私達は笑いながらしゃべってました。

そんな様子に周りが引いていたのは気にしません！

《み～ずき♪》

「幽乃ちゃん？」

私が教室に戻ると瑞希はこちらを向きました。
目元が赤いですね…きっと、泣いてたんでしょう。

《はい、これ》

「！これは」

私が手紙を差し出すと瑞希は驚きながら受け取りました。

「幽乃ちゃん、ごめんなさい」

《どうして謝るの？》

「私が手紙を盗られたばかりに幽乃ちゃんやみんなに迷惑をかけてしまって……」

《瑞希、謝らないで私達、親友でしょ？それにこういうときは、ありがとうって言ってほしいな》

「……幽乃ちゃん」

《うん》

「ありがとうございます♪」

《よろしく♪》

私達はしばらく笑いあっていました。

～Ｎｏ　ｓｉｄｅ　～

「ちくしょう、あいつらめ…」

根本はＦクラスに負けた後、女装させられ、写真撮影会までやらされていた。

「覚えてろよ馬鹿共（Ｆクラス）！仕返ししてやるからな…」

懲りもせずにまたなにか企んでいるようだ。

「だが、なぜ理科準備室なんだ？」

撮影会が終わるとＢクラスの生徒が制服は理科準備室にあると言っていたのだ

ガラッ

「さて、何処にあるんだ？暗くてなにも見えんな……（パチッパチッ）ちっ、電気通ってねぇのかよ」

中に入って、根本は手探りで辺りを探した。
今は夕暮れ時、窓があるとはいえ室内は暗かった。
ピシャ
「な、なんで、いきなりドアがしまったんだ?」
シュボッ
「?誰かいるのか?」
部屋が明るくなったので根本が灯りの方を向くと…
そこには…
「ひ!」
アルコールランプを持った人体模型がいた。
「な、なんだ。脅かしやがって…」
根本は一安心していたが…
《……ハッ》
「?」
《ハハハハハハハッ!》

「！」

いきなり人体模型がその体をゆすりながら笑い始めた。

「お、おい、なんの冗談だよ！誰かいるんだろ！早くでてきやがれ！」

だんだんと顔を青くしながら根本は懇願するように叫ぶが返事は返ってこず、笑い声だけが響いている。

ポンッポンッ

不意に根本の肩を誰かが叩いた。

「よ、ようやく出てきたな！」

根本は強気になり、勢いよく振り返ったが…

そこには…

「ひぃ！」

そこには同じくアルコールランプを持った骨格標本が立っていた。

《ヒヒヒヒヒヒヒヒッ！》

その骨格標本もその体の骨をカラカラと鳴らしながら笑い出した。

《ヒヒヒヒッヒヒヒヒヒハハハハッハハハヒヒヒヒヒヒヒヒヒフ

フッフフホホホホッホホホヒッヒヒヒヒヒヒヒヒヒハハハハハハッハハフフフフフフフフホホッホホホホホホハハハハハハッハハフフフフヒヒヒッヒヒヒヒヒヒハッハハハハハハヒヒヒヒヒヒヒッヒヒヒヒホホッホホホホホホハハハハハハッハハヒヒヒヒヒヒヒヒヒフフフフホホホッホホホホホホハハハハハッハハハハハハ！≫

「あ、あぁ……」

二体の笑い声が室内を包んでいき。
根本は耐えきれなくなり気絶した。

翌日、発見された根本は震え続け、暗闇になると錯乱するようになってしまった。
のちにこれを聞いた生徒はこういった。
「旧校舎の理科準備室にある人体模型と骨格標本には魔物が住み着いている」と……

～Ｎｏ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第十三話（前書き）

第十三話

「一騎打ち？」

Ｂクラス戦の翌々日です。
補給試験も終わって、Ａクラスに宣戦布告に来ました。
今回の戦争は私も一緒です♪

「ああ。ＦクラスはＡクラスに一騎打ちを申し込む」

「うーん、何が狙いなの？」

「もちろん、Ｆクラスの勝利よ」

今、雄二くんは秀吉くんの双子のお姉さんの木下優子さんと交渉しています。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「なる程、賢明な判断だな。ところで、Ｃクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったわよ？何の問題もなし」

秀吉くんが震えていますね…
大丈夫ですよ。私もいます。

「Ｂクラスとやりあう気ってある？」

「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

昨日の毒キノコの姿を思い出したんでしょうね。

私は見てないんですが、想像しただけで吐き気がします……

「あぁ、アレが代表をやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだされてないようだがな」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずよね？」

「あの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっていることを。規約には何の問題もない。Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「……それって脅迫？」

「人聞きの悪い。ただの忠告だ」

脅しと変わらないよ雄二くん

「うーん……わかった。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないから、その提案受けるわ」

「え？本当？」

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」

確かにあれもトラウマものだもんね。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいわよ？」

「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているのか？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし」

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だわ。その言葉を信用出来ない」

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

「ホント？嬉しいな♪」

「その代わり勝負の内容はこっちで決めさせてもらう。それくらいいいよな？」

「え？うーん」

木下さんは再び悩み始めた。

といいますか、雄二くんはあくどいね。

「……受けてもいい」

「ぅおっ！」
「きゃっ！」

突然、二人の間に美少女が現れました。

「……雄二の提案を受けてもいい」

その少女はＡクラス代表にして私のもう一人の親友の霧島翔子でした。

《しょーこー♪》

「……久しぶり幽乃」

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

「……！（カチャカチャ！）」

『ムッツリーニ！手伝うぞ！』

『レフ板はまだか！』

『照明、持ってきたぞ！』

《皆さんどうしたんでしょう？》

いきなり皆さん（特にＦクラスの人達）が騒ぎ始めました。

「じゃあ、こうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

「交渉成立だな」

『坂本！何を勝手に！』

『そうだぞ！まだ姫路さんが了承してない！』

注意したいなら作業をやめたらいいのに……

「心配するな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

「いつ、どこでやる？」

「勝負会場はここ、時間は十時からでどうだ」

「分かったわ」

「よし、みんな教室に戻るぞ」

いよいよＡクラス戦が始まります。

第十四話

Aクラス

「では、両名共準備は良いですか？」

立会人はAクラス担任で学年主任でもある高橋先生が務めるみたいです。

「あぁ」

「……問題ない」

「それでは一回戦の人、どうぞ」

「あたしから行くわ」

向こうは木下さんが出るみたいですね。

「ワシがやろう」

秀吉くんが出るようです。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

？なにか用事でもあるんでしょうか？

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

あ……

「あ、姉上？これにはじゃな？」

「ちょっとこっちに来てくれる？」

「ま、待つのじゃ姉上！話を…」

「い・い・か・ら！」

「……わかったのじゃ…」

秀吉くんが廊下に連れて行かれます。

た、大変です！

《明久！ちょっと行ってくる！》

「え？幽乃？」

私は急いで廊下に向かいました。

「姉上、話とは……どうしてワシの腕を掴むのじゃ？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしている事になっているの？」

扉を開けると秀吉くんの腕を掴んでいる木下さんがいた。

「は、話を聞いてくれ姉上！」

「フフフッ、言い訳は結構よ…」

そうして、秀吉くんの関節を……って、まずいです！

《待って！》

「ゆ、幽乃？」

「あら、確か吉井くんが持っていた人形ね。なにか用かしら？」

二人は私に気付いてこちらを向いています。

《お願い、秀吉くんを許してあげて》

「だめよ、この演劇バカのせいで私のイメージが下がったのよ」

《お願い……》

キラキラッ（瞳が輝いている音）

「う」

キラキラッ（瞳が輝いている音）

「うぅうぅぅ」

キラキラッ（瞳が輝いている音）

「……分かったわ。今回だけよ」

「ありがとう姉上、それとすまなかったのじゃ」

「今度から気を付けなさいよ？」

私達は教室に戻りました。

「それでは一回戦を始めて下さい」

高橋先生から試合を始めるよう言われたが…

《ねぇ、雄二くん》

「なんだ？」

《ここは棄権しない？》

『『『なに！？』』』

Fクラスから驚きの声があがりました。

「……理由はなんだ？」

《木下さんに迷惑を掛けちゃったでしょう？だから、そのお詫び》

《それに、雄二くんも他に作戦を考えているんでしょう？》

「……そうだな。木下姉には迷惑を掛けたからな。ここは棄権しよう」

「分かりました。Fクラスが棄権するので、この試合はAクラスの勝利です」

高橋先生の宣言で一回戦が終わりました。

次は二回戦です。

第十五話（前書き）

明久の成績が明らかに！？

ノッポガキさん、感想ありがとうございます！

第十五話

「それでは二回戦の人は前へ」

「私がいきます」

Aクラスからメガネを掛けた女の子が出てきましたが、誰でしょう？

「よし、明久行ってこい」

「え？僕？」

おぉ！ついに明久ですね！

《頑張ってきてね！》

「うん、瑞希ちゃん幽乃をお願い」

「はい、明久くん勝ってきて下さいね♪」

「任せて！」

明久が中央に進んでいきます。

「教科はなににしますか？」

「化学でお願いします」

女の子が宣言しました。
得意科目でしょうか？

「では、始めて下さい」

「「試獣召喚（サモン）！」」

『Ｆクラス　吉井明久
ＶＳ
Ａクラス　佐藤美穂
化学
１７５点　ＶＳ　３６７点』

『『なにー！』』

Ａクラスの人達は驚いていますね。

「なんだあの点数、本当に明久か？」

……こっちにもいましたよ…

『どういうことだ！？』

『あいつ、確か観察処分者だろ！』

『まさか、カンニングしたの！？』

「そこまで言わなくても……」

《明久！落ち込まないで》

「そうですよ。明久くんが頑張っていたのは私達が知ってますから」

私と瑞希はすぐに駆け寄って、明久を慰めました。

「……吉井、元気だして」

あれ？翔子？
こっちに来ても平気なの？

『な！？代表に慰められているだと！』

『代表は優しいわね』

『うらやましくて吉井を殺しそうだ……』

あ、これでもAクラスの人達には好印象なんだ。
あと最後の人、物騒だよ？

『異端者がいるがヤるか？』

『待て、今は霧島さんや姫路さんがいるんだ。迂闊にヤれんぞ』

『卑怯だぞ！吉井』

Fクラスの方も物騒だよ！？

「……」

あれ？雄二くんが不機嫌そうにこっち見てる。
嫉妬してるのかな？

「そろそろ試合を始めてください」

「あ、はい。ありがとう幽乃に瑞希ちゃんに霧島さん」

《頑張ってね！》

「うん、待たせてゴメンね、佐藤さん。それじゃあ始めよう！」

「手加減しませんからね！」

二回戦がようやく始まった。

数分後

『Ｆクラス　吉井明久
ＶＳ
Ａクラス　佐藤美穂
化学

１６点　ＶＳ　１９点』

「まさか、ここまでやられるなんて思ってもいませんでしたね…」

「はは、僕もだよ」

「ですが、そろそろ決着をつけましょう」

「そうだね…」

二人とも自分の武器を構えたまま動きませんね…

「「はぁ！」」

ザシュ！

『Ｆクラス　吉井明久

ＶＳ

Ａクラス　佐藤美穂

化学

０点　ＶＳ　０点』

「両者、戦死のためこの試合、引き分けです」

こうして二回戦は終わりました。

第十六話（前書き）

一気に二試合書きました！

それでは、どうぞ！

第十六話

「では次の方、どうぞ」

「……（スクッ）」

お、次は康太くんですね。

「じゃ、僕が行こうかな」

Aクラスからは、ボーイッシュ？な女の子が出てきました。

「一年の終わりに転入してきた、工藤愛子です。よろしくね」

「科目は何しますか？」

「……保健体育」

保健体育。

この科目は康太くんの最強の武器だったね。

「土屋君だっけ？　随分と保健体育が得意みたいだね？」

向こうの工藤さん？が康太くんに話しかけてきました。

「でも、僕だってかなり得意なんだよ？君とは違って…

実技でね♪」

「……！（ブシャァァー！！」

工藤さんの言葉に康太くんの鼻から滝のように……って。

「ムッツリー二！！」

《康太くん！？》

私と明久はすぐさま康太くんの元に駆けつけました。

「吉井君だっけ？ボクでよければ保健体育を教えてあげるよ？もちろん……実技で♪」

「え？それは…」

明久！惑わされちゃダメです！

「アキには永遠にそんな機会がないから、保健体育の勉強なんていらないのよ！」

なんですと！

それは明久に失礼ですよ！

「それに実技は私が教えます！」

ムニュ

「ムガッ！」

瑞希！

対抗心を燃やすのはいいけど、それは大胆だよ！
それに、そのままじゃあ明久が窒息しちゃうよ！

「なら、そっちの坂本くんは…」
「……雄二には私が教える」

「翔子！お前はなにを言ってるんだ！」

……まさに阿鼻叫喚ですね……

「そろそろ、始めてください」

高橋先生は冷静だな～
だけど若干、頬が赤いですよ？

「はーい。試獣召喚っと」

「……試獣召喚」

二人の召喚獣がそれぞれ武器を持って現れました。

康太くんの方はBクラス戦で見せた二本の小太刀です。対する工藤さんは…

『な、なんだ！？あの巨大な斧は！』

召喚獣の二倍はある斧が出てきました。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんの召喚獣が斧を振り上げています。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」

そのまま無慈悲に斧を振り下ろす工藤さん。

《きゃっ！！》

見てられません！

「大丈夫よ幽乃。だって…」

「……加速」

「え？」

「……あれは、ムッツリーニなんだから」

「……加速、終了」

康太くんがそうつぶやいたので、目を開けると工藤さんの召喚獣が全身から血を吹き出して倒れていました。

『Ｆクラス　土屋康太

ＶＳ

Ａクラス　工藤愛子

保健体育

573点　VS　446点』

「そ、そんな……このボクが……！」

相当ショックだったようで、工藤さんは床に膝をついています。

「……（スッ）」

「え？」

「……いい試合だった」

「あ、ありがとう／／／」

あれ？
工藤さんの顔が赤いけど……
あれあれ？

「勝者、Fクラス」

こうして、三回戦は終わった。

「次の方は？」

「は、はいっ。私です！」

こっちからは瑞希が出ます。
さぁ、相手は誰ですか！

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスからは、男の子が出てきましたが、
誰でしょう？

「やっぱり来たな。学年次席、久保利光」

……そうですか…
あの人がそうなんですね……
……気を付けないといけませんね。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「それで始めてください」

「「試獣召喚（サモン）！！」」

『Fクラス　姫路瑞希

ＶＳ

Aクラス　久保利光

総合科目
４４０９点　ＶＳ　３９９７点』

『なんだあの点数！？』

『いつの間にあんな実力を！？』

『この点数、代表に匹敵するぞ！』

Aクラスから驚きの声があがっていますね。

「ぐっ…！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだね？」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

瑞希、嬉しいこと言ってくれるわね。

でも……

『姫路さん、最高！』

『姫路さん、好きだ！』

『結婚してくれ！』

……この人達には不要だよね……

この後、瑞希が一刀のもとに久保くんを倒して四回戦も終わった。

次はいよいよ最終戦！

第十六話（後書き）

次はいよいよ最終戦！

第十七話（前書き）

遂に最終戦！

果たしてどうなるのか？

第十七話

「最後の一人、前へどうぞ」

「……はい」

Aクラスからはやはり翔子が出てきました。

「俺の出番だな」

雄二くんがでるんですね…

「教科はどうしますか」

「教科は日本史」

……ん？

「内容は小学生レベルで」

……あれ？

「方式は百点満点の上限ありだ」

これって……

雄二くんの宣言で周りが騒ぎ始めました。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ』

注意力？集中力？

違います……雄二くんがねらっているのはそこじゃありません。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少し待っていてください」

高橋先生は教室を出て行きました。

「……ねぇ、雄二」

高橋先生の姿が見えなくなると明久が雄二くんに話し掛けました。

そばには当然、私と不機嫌そうな瑞希がいます。

「なんだ明久？」

「雄二には勝算があるんだよね？聞かせてくれない？」

「そうだな。話してやるか」

「それはある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

あぁ……やっぱり……

「その問題は……“大化の改新”だ！」

バキッ

突然の鈍い音に周りは音のした方を向いています。
そこには、倒れた雄二くんと拳を振り切った明久の姿がありました。

「ちょ、ちょっとアキ！いきなり何してるのよ！」

む、今、明久の事を気軽に呼んだような気がしますね。
周りもなにが起きてるか分かってないようですが……
今はそれどころじゃありません！

「雄二！お前は何をしようとしたのか分かっているのか！」

《雄二くん！翔子の大切な思い出をなんだと思っているの！》

「最低です！坂本くん！」

翔子の……
翔子の大切な思い出を！

「……てめぇらに、なにが分かる！これは俺と翔子の問題だ！他人が口をはさむな！」

《雄二くん！それでいいの？》

「なんだと？」

《翔子とこんな形で決着をつけて、それで雄二くんは納得できるの？》

「……」

「雄二…」

「坂本くん…」

《雄二くん…》

ガラッ

「問題が出来ましたので、移動を……？何かありましたか？」

問題が出来上がったようですね。

雄二くんと翔子はそれを聞き、出口に向かいます。

「雄二！」

「明久……これは俺へのけじめだ」

雄二くんはそう言うと教室から出て行きました。

「アキ、どうしたのよ？」

「なぜ、あんなに怒っていたのじゃ？」

「……意味が分からない」

いつものメンバーが近寄って来ました。

「ゴメンみんな、これは話せないよ…」

そして私達はテストの様子を見ることができる大型ディスプレイに向かいました。

～雄二　ｓｉｄｅ～

あいつら勝手なことばかり言いやがって！
俺と翔子のなにが分かるってんだ！

「それではテストを始めてください」

さて、目当ての問題は…

＜次の（　）に正しい年号を記入しなさい＞
（　）年　平安京に遷都
（　）年　鎌倉幕府設立
・
・
・
（　）年　大化の改新

あった！あったぞ！
これで…

《雄二くん！それでいいの？》

！なんで今になって！

《翔子とこんな形で決着をつけて、それで雄二くんは納得できるの？》

正直、納得なんてできるか！

だが、これしか方法が…

……本当にこの方法しかなかったのか？

……はっ、俺もバカだな…

……こんな方法じゃなくても他にいろいろとあったろうによ……

なら、俺のやることは一つだな……

～雄二　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

「それでは結果を発表します」

『Ａクラス　霧島翔子　９７点

ＶＳ

Ｆクラス　坂本雄二　０点』

「五回戦はＡクラスの勝利です」

この勝負の結果にＡクラスは呆気にとられ、Ｆクラスは怒りをあらわに視聴覚室に向かいました。

だけど、この結果に私と明久、瑞希は笑顔を浮かべていました。

第十七話（後書き）

次回は戦後対談です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3171z/

バカとテストと召喚獣～僕の家族は幽霊！？～

2011年12月28日08時50分発行